（様式５）　　令和２年度　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	Ｒ２Ｋ１６	氏　名	鶴岡　泰樹
研究主題 －副主題－	施設分離型小中一貫教育校におけるコーディネーターの意識変容 －SWOT 分析と熟議を組み合わせた研修プログラムを通して－		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	服部　信雄
所属	三鷹市立羽沢小学校	所属長	亀山　桂子

キーワード：小中一貫教育校　小中一貫教育コーディネーター　学園運営　SWOT 分析　熟議

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

近年、全国的に小中一貫教育校（学園）が増加しているが、半数以上の学校が施設分離型であり、学校間の距離が小・中学校間の連携を難しくしていると考える。このような状況でも、小・中学校が相互に情報交換をしながら小中一貫教育校（学園）運営を行っていくためには、校長のリーダーシップとミドルリーダーの力の発揮が欠かせない。

本研究では、ミドルリーダーである小中一貫教育コーディネーター（以下、「Co.」とする。）に焦点を当てて、研究を進めていく。Co.が抱えている課題は、「Co.が自身の役割を理解していない」、「Co.の意識や意欲に個人差がある」、「Co.が職務内容を詳しく学ぶ機会がない」ということである。これらの課題を解決するために、本研究では、施設分離型小中一貫教育校における Co.のための研修プログラムを実施し、意識を変容させることを目的として研究を進める。

２　研究の方法

調査研究
- 文部科学省の手引きの分析
- 教育委員会へのインタビュー
- 先行研究での成果と課題の整理
- 研究協力校の現状の整理
- 研修方法の検討（SWOT 分析、熟議）

↓

実践研究（アクション・リサーチ）
- Co.の実態調査
- 研修プログラムの構想
- 研修の実施
- Co.の変容分析（発言、アンケート、インタビュー）

３　研究の結果

(1) 調査研究　Co.の役割と現状

文部科学省及び都内Ａ市の資料、教育委員会へのインタビューから、本研究では、Co.の役割を「小・中学校間の連絡調整」、「学園運営に対する提案」、「同僚教員を巻き込んだ学園運営の推進」と捉えることとする。

先行研究から、Co.の現状や課題は、Co.の力量形成の必要性、Co.がチームになって学園運営を推進していくことの重要性を示唆していることが分かった。

(2) 実践研究　アクション・リサーチ

ア　研修プログラム実施前のCo.の意識

研修プログラムを実施する前に、研究協力者の Co.（６名）にアンケート調査を実施した。研究協力者の Co.は、小中一貫教育のメリットとして、「小学校と中学校の連携」、「子供の変容を長期間で見られること」、デメリットとして、「調整の難しさ」、「時間確保の難しさ」、「教員の負担増」、「教員の意識・モチベーション」を挙げていた。

また、Co.の役割については、「調整」、「情報共有」、「計画と検証」、「活動の見直し」などを挙げていた。加えて、Co.としてやりたいことが「ない」との回答も多数見られた。

イ　Co.研修プログラムの構想・実践

表１　Co.研修会の実践記録

第一回	ねらい	学園の Co.同士のつながりを深める。学園の実態を認識し、学園運営に関する考えや思いの共有を図る。
	内容	学園の実態を認識するために SWOT 分析を実施する。
第二回	ねらい	共通理解した学園の課題への取組について、Co.でじっくり話し合い、多様な考えを出し合う。
	内容	学習習慣や学習方法などを含めた学力の向上のための取組について、多様な意見を出し合って熟議する。
第三回	ねらい	共通理解した学園の課題への取組について、Co.が話し合い、管理職会に提案をする。
	内容	交流行事の在り方について多様な意見を出し合って、Co.会としての提案をする。

ウ　研修プログラムを終えたCo.の変容

Co.に求められる役割に着目して発言やアンケートの回答を分析し、Co.の変容を分析した。

【小・中学校間の連絡調整】

「学力向上の話をするときには、Co.会に研究主任も呼びたい。」(第２回発言)
「次の Co.会では、交流行事について話したい。」（第２回発言）
「来年度の交流行事の方向性が決まった。」(第３回発言)

Co.会に研究主任も呼びたいという発言は、Co.会と研究主任会を別々に行うよりも一緒に話し合うことによって、連絡調整がスムーズにできると考えてのことであった。この発言からは、来年度の交流行事の調整をし、決定しようという意識の表れと捉えることができる。

【学園運営に対する提案】

「授業力や授業改善も大事だが、子供に視点を当てた授業研究がしたい。」（第２回発言）
「新たに小学校の運動会・夏休み補充学習に、中学生ボランティアを活用したい。」（第3回発言）

学園研究会について、授業研究の進め方、交流行事について新たな取組の提案があった。これらの発言は、学園運営に対する提案を意識している姿であると考えられる。

【同僚教員を巻き込んだ学園運営の推進】

「学力の捉え方の相違がある。全教員に聞いてはどうか。」（第２回発言）
「Co.以外の教員の意見が見えてくるとよい。」（第２回アンケート記述）
「Co.会だけでなく、全教員で話し合いができたらよい。」（第3回発言）

Co.会を重ねる中で Co.だけで話すのではなく他の教員の声を聞いてみたい、一緒に話したいという意見が多く出された。これは、同僚教員を巻き込んで学園運営を実施することを意識している姿であると考えられる。

【人間関係の構築・主体的に学園運営に関わる態度】

「仲が深まった。」（第１回発言）
「話し合えたことがまずよかった。」（第1回アンケート記述）
「次のCo.会はいつやりますか。」(第２回発言)

話合いの前提となる「Co.同士の人間関係を構築することができた」、「次回の Co.会をやりたい」という発言からは、Co.が学園運営を自分事として捉え、主体的に関わろうとしている姿であると言える。

エ　実践研究から得られた成果と考察

Co.の発言からは、前述のような成果が見られた。事後アンケートからは、「学園の現状の共通理解」、「Co.同士の意思疎通」の数値が向上した。加えて、管理職への事後インタビューでは、「Co.が学園の取組の方向性と自校の取組の方向性をすり合わせながら調整している。」という回答があった。このことから、Co.が学校運営と学園運営を関連付けて考えていることが分かった。

このように、Co.の意識変容が見られたことから、今回の SWOT 分析と熟議を組み合わせた研修プログラムは、一定の有効性があることを示すことができたと考えている。

4　研究の考察

(1) 研究のまとめ

調査研究を通して、Co.の役割を改めて明らかにすることができた。実践研究を通して、Co.による新たな提案や周囲の教職員を巻き込む場面が多く見られるようになった。今回の研究で Co.が学園運営のための連絡調整を行い、新たな提案をして、教職員を巻き込んで学園運営を行うことの重要性を再認識することができた。

(2) 本研究の課題

Co.の意識変容は確実に見られたが、全ての Co.が十分に高まったとは言えない。今後は、研修プログラムで高まった意識を継続させ、Co.が主体的に学園運営に関わっていくことが重要な課題である。

また、本研究では、学園運営の中核を担う Co.に焦点を当てて研究を進めたため、管理職会と Co.会の関連性について検討することはできなかった。今後は、円滑な学園運営のために、管理職会と Co.会が密接に連携を図っていくための取組を継続していくことも重要な課題である。

5　今後の展望

今回の研修プログラムを通して、Co.の意識変容が見られたという結果で終わることなく、今後も Co.が実際の学園運営において課題に気付き、その解決策を提案できるよう、本研究を成果が活用していく。

また、今後は、研究の成果を他学園でも活用することで Co.の意識を高め、各学園運営の充実に貢献していきたいと考えている。